



大澤夏美 著 国書刊行会

## 「ミュージアムグッズのチカラ」

只木 慧  
Kei TADAKI

趣味の一つが美術館や博物館、ミュージアムに行くことなのだが、ここ数年は新型コロナウイルスの影響もあり全く行くことができなかった。今はwebで展示品を見られる場合もあると聞かすが、ミュージアムに行くのは展示品を見ることはもちろん、その場の静かな空気、展示品と向き合う高揚感、一緒に行った人と感想を述べ合う時間、それらすべてが好きだからであり、何か物足りない。

そしてその楽しみの一つがミュージアムショップである。昔はポストカードや図録くらいしかなかったように思うが、今はファイルにマスキングテープなどの事務用品、展示品をイメージした菓子、トートバッグといった実用品などもある。それどころか日本全国だけでもさらに多様なミュージアムグッズが生まれている。それらについて紹介してくれるのが本書である。

本書には日本全国の美術館や博物館、水族館や動物園などのミュージアムグッズが紹介されている。しかもそれをただ紹介して終わるのではなく、実際の開発の方などへのインタビューにより、開発のコンセプトやグッズのこだわりがきちんと解説されている。それによりただ面白くかわいいものを作っているのではなく、その前提となる展示品への愛情や、それを多くの人に知ってほしい、感動を持ち帰ってほしいという思いが感じられる。

例えば大分県にある中津市歴史博物館には、石垣の形を模した琥珀糖がある。中津城の石垣は九州最古の石垣であるが、黒田氏・細川氏それぞれによって別の時代に造られたことにより石の積み方が二分割に見える様が、琥珀糖によって美しく再現されている。そして見た目にも美しいだけでなく、これを作るために色合いを試行錯誤し、石垣としての学術的な正確さなどを追求した物語を読むと、この琥珀糖、そして石垣がどんなに地元の人に愛されているかが伝わってくる。その思いが実った形として、新型コロナウイルスの影響で博物館が休館中には、海外からの注文まであったそうだ。ミュージアムに行けない時間も、ミュージアムグッズがその代わりとして活躍してくれたのである。

「ミュージアムグッズのチカラ2」では1巻以上に「ミュージアムグッズの役割とは？」という問いがたびたび関係者に投げかけられている。そこには新型コロナウイルスを踏まえた

